

散佚「宇治大納言物語」成立の周辺

— 源 隆 国 と 説 話 —

高 橋 貢

一、散佚「宇治大納言物語」の面影

すでに故片寄正義氏（「今昔物語集の研究」上）等によつて報告されているように、宇治大納言源隆国撰による散佚「宇治大納言物語」の佚話・佚文と考えられる話や、面影を伝える文章が今日、七大寺巡礼私記、中外抄、雑談集、河海抄、異本紫明抄、宝物集、園、城寺伝記、愚管抄、真言伝、是書坊絵詞等に残されている。それらの断片的な話を見ると、この「大納言物語」は靈験・奇瑞の話、歌をめぐつての話、貴族や物語作家の裏話等、仏教・世俗に関する話を集めていたものである。現存する話は全部日本で起こつた話であるが、宇治拾遺物語の序に「世に、宇治大納言物語といふ物あり。（中略）天竺の事もあり、大唐の事もあり、日本の事もあり。それがうちに、貴き事もあり、をかしき事もあり、おそろしき事もあり、哀なる事もあり、きたなき事もあり、少々は、空物語もあり、利口なる事もあり、様々やう／＼なり。」と記している一文によると、中国・印度にもわたる様々の話を集めていたもようである。

「大納言物語」の中には今昔物語集や宇治拾遺物語と重複する話

散佚「宇治大納言物語」成立の周辺 — 源隆国と説話 —

があることから、「今昔」や「宇治拾遺」と同一書と考えられていた時期もあった。しかし今日では「今昔」等に影響を与えてはいるが、同一書とはいえないということにほぼ確定して来ている。それでは説話文学史上における「大納言物語」、及び撰者隆国の価値は落ちたのかというと、そうとはいえない。「大納言物語」の直接・間接的な影響を後続の説話集等に大きく与えており、それらの成立や編集に刺激を与えた功績は大きい。

長野嘗一氏（「宇治大納言をめぐる」日本文学の諸相所収、その他）も述べておられるが、隆国、及び隆国周辺の人々は説話に興味を持ち、また説話集を編集するためのめぐまれた地盤を持っていた。本文ではそれらがどの程度のものであるかをまとめ、述べてみる。

二、隆国の文学的環境

最初に隆国までの系統、及び文学的環境について概略する。

隆国は醍醐源氏の血筋を受けている。即ち、祖父は西宮左大臣高明であり、父は四納言の一人、俊賢である（尊卑分脈）。高明は政

治的には藤原氏のために失脚させられ、安和の変によって左遷されているが、歌人としてはすぐれ、後拾遺和歌集以下、勅撰和歌集に和歌は二十首以上とられてゐるし、高明の歌を集めた歌集に西宮左大臣御集がある。

高明の兄弟に兼明親王がいる。親王は詩文に長じ、特に本朝文粹に「菟裘賦」「憶龜山二首」「髮落詞」「池亭記」等の詩文がとられてゐる。

俊賢は和歌の方では知られていないが、隆国は勅撰集に数首の歌を載せてゐる。勅撰作者部類によると、後拾遺集、千載集、新古今集、続古今集、玉葉集にそれぞれ一首ずつ載せてゐる。

なお狭衣物語の作者は従来六条斎院宣旨(源頼国女)といわれていたが、近年宣旨の再婚の相手を隆国とする説が有力になつてゐる(日本古典文学大系・日本古典全書「狭衣物語」解説)。彼女は、永承元年(一〇四六)に謀子内親王が賀茂斎院に入ると、宣旨に選ばれて内親王に仕えたが、以後内親王主権の歌合にたび／＼出席している。周知の通り、内親王と宣旨が物語に対して強い興味を持つていたことは天喜三年(一〇五五)に行なわれた物語合にあらわれているが、特に宣旨の物語への興味は隆国に何らかの影響を与えたと考えることができるのではないであらうか。

隆国の姉妹に成尋阿闍梨の母がいる。彼女の著とされるものに成尋阿闍梨母集がある。また子の成尋が入宋した時の日記に參天台五臺山記がある。(玉井幸助氏「成尋阿闍梨の家系」文学 昭和十八年七月、永井義憲氏「成尋阿闍梨母集の研究」日本仏教文学研究所収)。

狭衣物語・成尋阿闍梨母集・參天台五臺山記には、今昔物語集所収話と類似する話があるし、またあるいは類似話から影響を受けたのではないかと思われる箇所がある。左にその例を上げる。

一、狭衣物語 卷一に、狭衣中將(後に中納言)の思ひ人、飛鳥井女君を、中將の乳母の子、式部大夫が盗み出し、九州に連れて行くが、途中の虫明の瀬戸で女君は入水を企てて行方不明になる話がある。

貴族の姫君が盗まれる話は物語、説話に種々伝わっている。平安時代の物語、説話からは左のような例を上げることができる。

①、堤中納言物語「花櫻折る少將」には、中將が夜ふけに姫君の家に行つて女を車に乗せて帰る。ところが女は姫君ではなく、祖母の尼であつたという話を載せてゐる。

②、大和物語第一五五段は、内舎人が大納言の娘を奪つて逃げ、陸奥国の安積山に庵を建てて住んだ。女は男の留守の時、山の井に姿をうつして容貌の変つてゐるのに驚き、死んだ話である。この話は今昔物語集卷第三十第八「大納言娘、被取内舎人語」に同話がある。

③、更級日記には、帝の娘が火をたく衛士の家を見たく思い、衛士に負われて武蔵国に行つて住んだという伝説をのせる。

二、狭衣物語 卷一に、狭衣中將が夜な夜な飛鳥井女君を訪れるのを、お供の人が左のように批評している所がある。

「いかゝる事はなかりつるものを」「いかばかりなるべき吉祥天女ならん」「さるは、いと物げなき御事の氣色ぞすめる」

天祥天女との恋の記述は、平安時代の物語では、宇津保物語「初秋」、源氏物語「帚木」の巻に見られるが、一方説話集には左のよ

うな話がある。

①、日本靈異記 卷中第十三「生愛欲戀吉祥天女像感應示奇表縁」(今昔物語集卷第十七第四十五「吉祥天女攝像奉犯人語」に引用されている)は左のような話である。

和泉国の山寺に吉祥天女の像があった。信濃国の優婆塞がその像に「あなたのような美しい女を下さい」と祈った。するとある夜優婆塞はその像と通じた夢を見た。翌朝起きてみると、像の腰のところがけがれていた。

②、古本説話集 第六十二「和泉國々分寺住持艶寄吉祥天女事」は左のような話である。

和泉国の国分寺に吉祥天女像があった。鐘つきの僧がその像に恋をすると、ある夜天女が「お前の妻になろう」と夢に出て言った。夢のお告げに従って男は現れた女と結婚した。のちに男に親しい女ができると、妻は姿を消した。

三、成尋阿闍梨母集に左の話を記している。

a、摩耶夫人は釈迦を産んで死んだので、淨飯王が養い、育てた。

(さか佛、まやふ人と申ける、うみおきてうせたまひにければ、上ほんわうと申す、ひとりやしなひて、おひたて給ひたるこそはきゝはへれ。)

b、昔、悉達太子は花園に遊んで、四門から出ると、人間の生老病死の四苦を見て、出家した。

(それにむかし、太子、はなそのにあそび、いてたまふには、四めんのかとにんまるゝものおみしとて、かへりて、いまひとつ

のかとおはするに、おいてゆゝしけなるものをみる。またかへりてつきのに、やまるするものをみてかへり、つきのに、しぬるみてかへり給てのちに、よひいて、おはしけれ。)

c、成尋が入宋したと聞いた時の悲しい気持から、十五歳の時、三河入道大江定基が親を捨てて中国に渡る人だと聞いて、その時は何とも思わなかったが、今となって、その親の心はどんなであつたらうかと記している。

(ひかすもはかなくすきて、六月になりぬ。三月許に、まこと にわたり給にけりときゝはてゝ、いまはみのたいもかくにこそはと、いとあはれに、たくひなかりける身のすくせ、おしはかられたるにも、むかし十五許なりしほとに、みかはの入道といふ人わたるとて、たうにゐてたてまつるぬひ佛あつまりて人のみしに、いかなる人そと人のいひしに、をやをすてゝわたる、あはれなと人いひし、なにともおほえさりし、いまそをやいかにとあはれに、これも人はさこそいふらめ、いまそ身をしるに、いみしういかてと、思ひいてらるゝことおほかりけるありさまの、この世にいきたまへらんにいきあはすは、はちすのうへにてそとのたまひし、なとてものもいはて、たゝなまかなしむことのみして、いたしやりきこえけむとそ、くやしうわひしうおほゆる。)

右の話のうち、aは今昔物語集 卷一第二「釋迦如来、人界生給語」に、bは今昔物語集 卷一第三「悉達太子、在城受樂語」に同様の話がある。またcの大江定基の入宋に関する話は、今昔物語集 卷十九第二「參河守大江定基出家語」等に見られる。

四、參天台五臺山記 第七の三月七日の条に左の話を記している。

弘法大師は青龍寺で恵果和尚より請雨經法を伝受し、本朝に帰つて、神泉苑で請雨經を修して雨を降らせた。

(行事張大保來談話。問云。日本國亦有_ト如_ニ關梨_一祈_レ雨_レ得_レ感應人_ト否。答云。多々也。就中眞言宗祖師弘法大師海堂於_ニ唐朝_一從_ニ青龍寺恵果和尚_一傳_ニ受_ニ請_ニ雨_ニ經_ニ法_一。歸_ニ本朝_一後依_ニ官家請_ニ於_ニ神泉苑_一修_ニ請_ニ雨_ニ經_一。時修圓僧都成_ニ嫉妬心_一驅_ニ諸龍_一納_ニ水瓶_一。而弘法大師祈雨壇上茅龍穿_ニ堂上_一登_ニ天降_ニ大雨_一。後年又修_ニ祈雨法_一。於_ニ神泉苑池邊石上_一金色龍乘_ニ黑龍背_一出現。弘法大師并弟子高僧實惠大僧都・眞濟僧正・眞雅僧正・眞然僧正等十人同見_ニ金色龍_一。餘人不見。大師云。此金色龍は無熱池善如龍王之類也云々。其後大雨普下。從_ニ其以來眞言宗修_ニ此秘法_一必感_ニ大雨_一。

近五十年來見_ニ仁海僧正修_ニ此法_一每度感_ニ雨_一。世云_ニ雨僧正_一。其弟子現有_ニ成尊僧都_一修_ニ請_ニ雨_ニ經_ニ法_一感_ニ大雨_一。

右の話の中の、修円僧都が弘法大師の祈雨を邪魔する話は、弘法大師御伝巻下、及び太平記卷十二「神泉苑事」にある(考証今昔物語集卷十四第四十による)。なお今昔物語集卷十四第四十一「弘法大師、挑修圓僧都語」に弘法大師と修円僧都が法力を競う話を記している。次に弘法大師が祈雨法を修した時、大師と主な弟子僧等十人だけが金色の竜を見た話は、今昔物語集卷十四第四十一「弘法大師修請雨經法降雨語」、打聞集第十九「弘法大師請雨經事」に見えている。

以上の点から見て、隆国の文学的環境は恵まれていたといふことができる。また、狭衣物語、成尋阿闍梨母集、參天台五臺山記に今昔物語集等に見える話と同様の話がある事がわかった。「大納言物

語」に右のような話がとられていたかどうかはわからないが、隆国がこれらの話を知っていたかもしれないこと、あるいは知る機会があったであろうと考えることは無理とはいえないであろう。

なお、隆国周辺の人が説話を持っていた証拠として、左の話を一つの資料としてとり上げることができる。

今昔物語集卷五第四十二「義孝小將、往生語」、及び大鏡「太政大臣伊尹」に後少將藤原義孝が往生した話をのせている。義孝の往生話は、平安時代中後期の人々の評判になっていたと見え、日本往生極樂記、栄花物語、後拾遺和歌集等、種々の書物に記されている。貴族の漢文日記には、台記 天養元年(一一七二)十二月十五日の条に見える。即ち左の通りである。

「去夜雨_ト雪、(宰相中将教長と)向_ニ世尊寺_一、乍_レ車、遣_ニ人見_レ之、有_ニ梅_一、宰相云、號_ニ往生梅_一、義孝居_ニ此所_一之故也。」

右は台記の筆者、藤原頼長が宰相中将藤原教長と世尊寺に雪見に行った時の記事である。右の記事の中で、教長は義孝が世尊寺にいたので、その一本の梅を往生の梅と号していると述べている。

義孝が生前世尊寺の紅梅の木の下に来て、念仏を唱え、往生を祈る話は、今昔物語集と大鏡にある。今昔物語集、大鏡にはこの話をだれが語り、伝えたとは記さない。なお今昔物語集には、この話の後に義孝が死んで藤原高遠の夢に出て詩を誦した話があるが、この話について、「其ノ後_テ、高遠ノ中将、此ノ文ヲ書付テ置テケリ。

此レヲ聞ク人、「道心有ル人ハ、後ノ世ノ事ハ憑シカルベシ」トナム云テ、讚メ貴ビケル。」と記す。大鏡には、故義孝は母、僧賀縁、藤原実資の夢に出ている。これらの記事によって、義孝往生の話が

貴族や賀縁等の僧によって、いろいろと語り、伝えられていたことが推定できる。ただし、高遠、実資等が今昔物語集所収話をその通りに語り、伝えたかどうかは、他に資料がないので明確にはできない。一方台記の記事によって、義孝の話を教長が知っていたことから、平安時代後期にこの話は貴族間に流布し、伝えられていたことは明らかである。

ところで、尊卑分脈によると、教長の母は源俊明の女である。

〔尊卑分脈「師實公孫」

教長

能書 哥人 左京大夫 參議正三位

母民部卿俊明女

保元、七十一出家 法名親蓮

同年八三配流 常陸國

俊明は隆國の子で、中右記等によると、故実にくいしい。しかし俊明が義孝の往生を知っていたかどうかは明らかではない。

なお俊明は江談抄 第一「佛神事」で、左のような話をしている。

「熊野三所本縁事。

又問云。熊野三所本縁如何。被答云。熊野三所ハ伊勢太神宮御身云々。本宮并新宮ハ太神宮也。那智ハ荒祭。又太神宮ハ救世觀音御變身云々。此事民部卿俊明所被談也云々。」

三、藤原頼通との関係

第二に隆國が藤原頼通と親しい間柄にあったことも、「大納言物

散佚「宇治大納言物語」成立の周辺 — 源隆國と説話 —

語」を成立させる一地盤として見逃すことはできない。

諸書に引用されている、元來「大納言物語」にあったと考えられる話を調べると、頼通が関係している話が二話ある。即ち左の話である。

愚管抄 第三所収の話は、一条院崩御の後、道長が御手箱を開いたところ、宸筆で「三光欲明覆三重雲一太精暗」と書いてあったので道長はその文書を全部読まないで焼いたという話であるが、この話の後に「宇治殿（頼通）ハ隆國宇治大納言。ニハカタラセ給ヒケルト。隆國ハ記シテ待ナレ。」という一文がある。

七次寺巡礼私記「興福寺焼亡後造畢間三箇勝事」は、永承元年（1050）に興福寺が焼失して再建した時の三つの勝事を記している。七次寺巡礼私記には、この勝事の始めに「口伝云」、後に「宇治大納言物語同之」と記している。ところで、興福寺が再建され、永承三年三月二日に供養が行なわれているが、この時の記事は「造興福寺記」にあつて、それによると、左の通り頼通と共に隆國が参加している。

「三月庚子。天晴陰。寅二點。安置佛像於金堂。左右樂所發神分音聲。須之止之。（中略）巳一刻。左大臣（頼通）。引率内大臣權大納言藤原能信卿。藤原長家卿。源師房卿。權中納言藤原資平卿。源隆國卿。（中略）式部大輔同資業卿等。到南大門前。」（本文は大日本仏教全書による）

右の二つの話や記事によって、「大納言物語」には、隆國が頼通と親しかったことに何か関係のある話が幾話かとられていたであろうことが考えられよう。

隆国が頼通と親しかったことを示す話として、左の二話を上げる
ことができる。

古事談 第二「隆國騎小馬事」——隆国は小馬を足駄と称して、馬に乗って頼通の邸を出入した。

(隆国卿於宇縣參仕宇治殿之時。真実ノ小馬ニ乗テ乍馬出入云々。大納言被申云。此ハ馬ニハ候ハズ。足駄ニテ候ハバ可蒙御免云々。宇治殿合入レ興給テ許容云々。)

古今著聞集 卷三「宇治大納言隆國臨時祭の陪従を勤むる事」——隆国が中将になった年のこと、臨時の祭の陪従の役を勤めるよう言われたので、隆国は怒って承知しなかった。ところが頼通が馬を与える、機嫌を直して勤めた。

(宇治大納言隆国卿、中将になりたりける年、臨時の祭陪従つかうまつるべきよし催されければ、腹立て装束うけとらず、衣ひきかづきて直慮にふされたりけるに、宇治殿、公武をもちて、御馬をたまはせたりければ、おきあがりて装束き、勤られ侍けり。)

隆国が頼通と親しい間柄にあったことは、頼通女寛子が入内して皇后になると、隆国が皇后宮大夫になっていることからいえる。

(栄花物語 卷三十六「根あはせ」)

「俄に關白殿に姫君おはしましけるを、いまだ稚くもおはしましける、やうく大人びさせ給けるを、上につゝみ申させ給へるを、さのみやはとおぼしめしければ、内に參らせ給。(中略)二月に后にたゞせ給。(中略)大夫には隆國の中納言、」
隆国は寛子や藤原頼宗の女延子が主催した歌合に出席したことも

あるが、その歌合の中に伊勢大輔等著名な女流歌人の名が見える(永承五年(1050)四月廿六日 前麗景殿女御延子歌絵合、天喜四年(1053)四月卅日 皇后宮寛子春秋歌合—平安朝歌合による)。

なお前記日本古典文学大系「狭衣物語」解説等によると、隆国の妻妾の一人宣旨の兄弟、頼資・頼綱は頼通の家司に属していたもようである。

四、隆国と天台宗

第三に、隆国が天台宗とどの程度関係があったかを述べよう。

右の参天台五臺山記 第七に、行事張大保の質問に答えて、成尋は弘法大師が請雨経を修して雨を降らせたことを述べてたことを記しているが、この記事に続けて、更に張大保と左の問答をしている。

「張大保重問云。閻梨何不修請雨法。修法華經法。答云。成尋非眞言宗。非弘法大師門徒。不學請雨經法。眞言宗中尚傳此法二人兩三人。深秘口傳。況他宗哉。成尋是天台宗智證大師門徒。祖師從青龍寺法全和尚。究學眞言秘奧。有水天祈雨。秘法有俱哩迦龍祈雨法。智學傳受而修法花法。所以何者。唐朝光宅寺雲法師講法花經二祈雨。至藥草喻品其雨普等四方俱下之文。大感降雨。加之誦法花一人感雨有其數。況八大龍王皆蒙於閻浮提可降雨佛勅。若干眷屬在法花座。此曼陀羅中列諸龍王。因之修此法二感雨也。」

右の一文から、前記永井氏の御指摘の通り成尋が天台宗の智証門徒であることは明らかである。

また大雲寺縁起（群書類従）を見ると、成尋は大雲寺に多宝塔を建立しているが、一方この寺は三井寺の別院である。なお大雲寺諸堂記（群書類従）によると、隆国は円生樹院、尊光院を、隆国の子俊明は西南院、権現堂を、藏原頼通は如来寺をそれぞれ大雲寺に建立している。

（大雲寺縁起）

帝都北岩藏山大雲寺者。（中略）天台一味之法流。三井之別院。

北禪清淨法華三昧云者當寺之事也。

成尋阿闍梨之事。（中略）如法院之東建立多寶塔。内陣三重壇築。法華曼陀羅木像四十六尊安置。）

（大雲寺諸堂記）

大雲寺諸堂目錄

圓生樹院。本尊阿彌陀。

宇治大納言隆國建立。

尊光院。丈六阿彌陀。

隆國建立。

西南院。本尊阿彌陀。

民部卿俊明建立。

権現堂。本尊藥師。

俊明建立。

如来寺。本尊阿彌陀。

宇治關白御建立。）

前記の玉井・永井氏の説のように、成尋の母が隆国の姉妹とする
と、成尋は隆国の甥になるが、隆国が成尋と關係の深いことは、成

散佚「宇治大納言物語」成立の周辺 — 源隆国と説話 —

尋が隆国の編纂した安養集を末に持って行っていることからわか
る。

「（国清寺の）寺主借南泉房安養集十帖了。」（參天台五臺
山記 第二（延久四年）六月二十日）

「寺（「主」脱カ）感安院養集無極。植蘭梨以感歡。」（右
同 七月十日）

右の資料によって、隆国が寺門系統の影響を受けたといつてよ
い。—なお宮田尚氏（「宇治大納言物語の側面」本誌、昭和四十
五年十一月）も宇治大納言物語が寺門系に近い立場に立つ作品で
あるという指摘をされている。

隆国は横川の浄土教からの影響も受けたようである。

隆国の兄、源顕基は後一条天皇の寵臣であったが、天皇の崩御後
横川で出家している（統本朝往生伝、後拾遺和歌集第十七等）。

今日、滋賀県坂本の西教寺に源隆国撰「安養集」十巻が現存して
いる。安養集の各巻の始めに「本南泉房大納言与延曆寺阿闍梨數
人共集」の注記がある。一方、奥書は

「右者以三寶園院本合書写之者也

明曆貳丙歲 八月吉日

江州栗太郡芦浦観音寺舜興藏」

と記している。この奥書によると、西教寺所藏本は江戸時代後期の
写本なので、右の注記が最初から注されていたのか、或は後人によ
って注されたのかは明らかではないが、編纂当時の事情を伝えてい
ると見ると、隆国は延曆寺の僧と共に安養集を編纂している。

安養集の内容については、谷隆戒氏（「源隆国の安養集の研究」

印度学仏教学研究 昭和三十四年三月)、永井義憲氏(「今昔物語の作者と成立」大正大学研究紀要 昭和四十年三月)等によって紹介されているが、両氏によって、印度、中国、日本の経、論、釈、二百余巻中から安養浄土に関する要文を抄出したものであること、安養集の序文から、惠遠の白蓮社の信仰運動の影響を受けていること、構成は、厭穢、欣淨、修因、感果、依報、正報、断簡の七門に分れていて、これが更に七十八科に分れているが、この構成は源信僧都の往生要集に倣っていることが指摘されている。―なお安養集については、岡一男早稻田大学名誉教授よりお借りした岡崎知子氏の「源隆国の安養集についての簡単なメモ」に負う所が大きい。

(安養集) 序 第一

緇素慕極樂世界之輩數十人、朋心一翹誠一撰下集。天竺震旦、顯密聖教、本朝人師、抄出私記二百餘卷、中、釋阿彌陀功德之要文矣、殺青甫就、情索相詣、約爲十卷、名安養集、蓋乃具足十念往生西方之故也、昔東晉、釋惠遠与高士謝靈運等、二百二十三人、於廬山巖下、修淨土業、臨終之時、聖衆來迎、思其勝躡、備所庶幾也、夫蒼蠅之飛、不過數步、適託驢尾、得絶釋焉、濃等罪障雖深、修練雖淺、若乘彌陀之慈筏、盡到安養之宝池、凡厥目視其事、而隨喜、同聞斯文、而歸依之者、无親无疎、願開引接集云爾

安養集卷第一 本南泉房大納言与延曆寺阿闍梨數人共集

- 一 厭穢 二 欣淨 十方諸佛證明極樂兜率優劣
極樂兜率相對極樂十方相對
三 修因 四 感果 五
依報 六 正報 七 断簡

私は以前(「中古説話文学研究序説」桜楓社)、三宝絵詞、日本往生極樂記、今昔物語集等、説話集の編纂の基盤を考える時に、源信僧都、または横川を中心とする浄土教家からの影響を無視することはできないと述べたことがある。「大納言物語」に直接どの程度浄土教の影響があったかはわからないが、隆国の考え方、思想に浄土教の影響があったと見ることができよう。

五、隆国の性格

隆国の性格―すでに片寄正義氏(「今昔物語集の研究」上)、長野嘗一氏によって述べられているが、―について記すと、人の失敗や一寸した事件に興味を持っている。

一、小右記 万寿二年(1025)二月九日の条、古事談 第一「行成書齊信之失錯于扇事」に左の話がある。

踏歌節会で大納言藤原齊信が失錯した。権大納言藤原行成はその失錯を曆に記すために扇に書いておいた。行成はその扇を家に置いておいたところ、子の行経がその扇をとって参内した。隆国はそれを見て人々に披露した。それを聞いた齊信は恨んだという。

(後一条院御時。踏歌節会出御之時。乍立三位中将。大納言齊信御称警蹕之事。権大納言行成御注其失錯於扇。置臥内。而子息少将行経取二件扇参内。隆国相替自扇見之。記父卿失礼事云々。及披露之条。齐信御怨恨無極云々。行成御云。為記曆。先注扇。為不忘彼日事。而行経取之参内。

後聞此事極不便云々。本自不快之中也。若作不知顔^二及多聞^一。齋信卿所^レ怨无可^レ然。至^二失錯^一者。可^レ無^レ所^レ通^レ敷^レ云々。——古事談による。

二、大鏡「太政大臣公季」に左の話を載せる。

頭中將源頭基の若君（資綱）の五十日の誕生祝いの時、母方の曾祖父、藤原公季が祝いの餅をくくませた。その時若君が泣いたので、公季の子の実成が「どうしてこのようにむずかるのか。」と言った時、公季は「お前もそうだったよ。」と言ったので、人々は笑った。中でも隆国はいつも思い出しては笑ったという。
（頭中將頭基の君の御若君^{資綱}おはすとかな。五十日をば四條に渡しきこえて、太政大臣殿^{公季}こそくくめさせたまひけれ。御祖父の右衛門ノ督^{實成}抱ききこえたまへるに、この若君の泣きたまへば、實成「例はかくもむづからぬに、いかなればかからむ。」と右衛門ノ督、たちの慰めたまひければ、公季「おのづから兒はきこそはあれ、ましもさざありし。」と、太政大臣殿^{公季}のたまはせけるにこそ、さるべき人々参りたまへりける、皆ほほえみたまひけれ。中にも四位ノ少將隆國の君は、常に思ひ出でてこそ、今に笑ひたまふなれ。）

以上、隆国が説話集を編纂するための文学的環境、性格等を述べたわけであるが、隆国が宇治大納言物語を編纂することのできる諸条件を持っていたことができよう。

付 隆国の意図

散佚「宇治大納言物語」成立の周辺 — 源隆国と説話 —

今日、「大納言物語」からの引用と伝えられている話が諸文献に見られる。ただしその中には、余慶僧正が空也聖人の臂を折り直した話（園城寺伝記所収）、藤原為時が源氏物語を書いた話（花鳥余情）等、宇治拾遺物語等に同話があるところから、これらの話は宇治拾遺物語あたりからの引用で、直接隆国撰宇治大納言物語からの引用とすることは疑問視されている場合がある（片寄正義氏「今昔物語集の研究」上。小内一明氏「小世継物語伝本考」(一)大東文化大学紀要、昭和四十四年一月)。従来疑問視されているこの両話を一応除外し、他の話の大部分が「大納言物語」にあったと仮定した場合、それらの話を含む「大納言物語」は読者・享受者にどのように扱われていたのであろうか。

故池田龜鑑氏（「説話文学に於ける知足院関白の地位」国語と国文学、昭和九年二月）が指摘されているように、中外抄 久安六年（1150）八月条に、藤原忠実が幼少の頃に女房が「大納言物語」を読むのを聞いたとある。また片寄氏の御指摘のように、和歌色葉（五、撰抄時代者、付私集口伝物語）に「在中將の伊勢物語、在次^{兼盛}が大和物語、宇治大納言、狭衣の大將、山蔭の中納言、有馬の王子、海人しらゝ、孔雀の御子、すゞりわり、宇治のはしひめ、住吉、源氏、世継、しのびね、かやうなる物語、しなぐくに侍り。」と記す。これらの記述から、和文体で書かれており、女房達の読む物語の系列の中に置かれてあったと見てよいであろう。

「大納言物語」は、今日では、印度・中国の話と共に日本の世間話を集めていたと思われることから、源氏物語・狭衣物語の系列よりはむしろ日本靈異記・日本往生極楽記の系列に近いと考えられて

いる。ただし「大納言物語」を「靈異記」等と共に説話文学のジャンル内に位置づけるとしても、「靈異記」「往生極楽記」ほど仏教的色彩も目的意識も濃くはなく、むしろより趣味的な意図で話を集めたのではないかと思われる。即ち隆国がこの物語を編集する場合、人々の語った世間話を主に集めたとしても、一方では仮作物語に対する意識が働かなかつたとはいえない。このことは、前述したように、隆国と再婚したといわれる六条斎院宣旨が謀子内親王に仕え、堤中納言物語の作者小式部等と共に物語合に参加したことからも間接的な影響を受けたかもしれない。内親王・宣旨ともに物語に對する強い興味を持っていた。このことを現存する「大納言物語」の話から推測すると、一方では仏教的な靈驗・奇瑞話があるが、他方源氏物語「末摘花」巻の一素材になった平仲墨塗りの話（異本紫明抄・河海抄）同話は古本説話集第十九）があるし、また敦忠が「殿守のとも宮人心あらば」と歌をよんだ話（宝物集）同話とと思われる話が今昔物語集巻二十四第三十二にある）がある等、物語や和歌と関連する話がある。現存の断片的で、しかもごく少数の話からでも「大納言物語」はいろいろの傾向の話があるので、隆国がどの種類の傾向の話を選んだのかをきめることはむずかしいが、右の資料によって、物語や歌話に對する意識も持っていたとみることはできよう。

注1、津本信博氏（早稲田大学「国文学研究」五十五集）は、成尋阿闍梨母集が部分的他撰という性格を持つていと述べておられる。

注2、本論文に引用した主な本文のテキストは次の通りである。日本古典文学大系―狭衣物語・日本靈異記・今昔物語集・宇治拾遺物語・愚管抄・栄花物語・古今著聞集。

岩波文庫―古本説話集。群書類従―江談抄。雑誌「建築史」―七
大寺巡礼私記、新訂増補国史大系―古事談。島津草子氏「成尋阿
闍梨母集・参天台五臺山記の研究」―成尋阿闍梨母集・参天台五
臺山記。史料大観―台記。なお宇治大納言物語・今昔物語集・宇
治拾遺物語は「大納言物語」・「今昔」・「宇治拾遺」の略称を
用いた。